



情報と文書館

つたえる
つなぐ
文書館

17

ツカウ・イカス ⑤

「大正2年山口県統計書」 (左) (米光家文書58) (右) (米光家文書57)

統計を考える 「山口県統計書」の世界

《数値で社会を描く》
 統計の意義、それは、数値を用いて、さまざまな角度から対象をみつめ、その実相を認識することにあります。

県内の社会活動や経済活動のうづりかわりを追跡するにあたって、統計データは便利で欠くことのできない貴重な情報であることは言うまでもありません。多種多様な調査項目を設定することにより、地域の現状をクリアに把握できます。さらに、データを用いて、他地域と比較することにより、地域の独自性を明瞭にすることも可能です。そして、弱点や問題点を把握分析することにより、地域の目指すべき「未来予想図」を描くことができるのです。正しく導き出された統計数値はそのため有効なツールなのです。

《統計のワナ》
 統計数値の分析にあたって、まず注目されるのは、「ほかよりも突出している」ということであり、それが自らのストロングポイントとして認識されることとなります。ところが、

が、一歩間違えば、自らの優位性を誇示することだけに終始してしまう危険性と背中あわせなのです。統計数値は、ターゲットの絞り方や情報の組みあわせ方によっては、恣意的な操作が可能であるという一面を持ち合わせていることは、統計数値に接するうえでの大切な留意点です。

統計に潜むもうひとつの大きなリスク、それはランキングの功罪です。ランキングの上位であることが喧伝されすぎてしまい、「全国〇位」に位置するということが常に前面に押し出されることになってしまうのです。そして、ランキング下位に位置するものが、必要のないものとして無条件に否定されたり、切り捨てられたりしてしまうことがしばしばです。数値により示された現状を冷静に受けとめて、次につながる有効な手立てを熟慮することが肝要と思われる。

生産物の統計を例にとってみると、主要な農産物である米や麦、近代日本のドル箱であった生糸、近代的な生産技術にうらうちされたセメントや化学肥料、こうしたきらびやかな「近代オールスター」の生産量・

**『山口県の統計百年』
(1960年代総務526)**

本書は、県総務部統計課が昭和43年(1968)に編集発行したものです。それまでの県によるさまざまな統計データを集約したものです。解説編と統計編からなり、関係法規と年表が付されています。また、解説には「統計業務の概要」として、統計調査のあゆみと統計刊行物が紹介されています。刊行後50年が経過しましたが、以後、統合的な統計書は刊行されていません。

